談山神社における彩色と塗装の材料調査

日本には古くからの木造建造物が多数現存しており、日本の文化の一端を担っています。これは、状態の良い部材は残し、悪い部材は取り替えるといった伝統的な修理によるものといえます。修理に関する考え方は塗装についても同様で、長い年月の経年劣化によって剥離や粉状化した塗膜（とまく）は掻き落とされ、新たに塗り直しをおこないます。この時使用される材料は、原則として過去の修理で使用されていた材料と同じものを用います。そのため、当時どのような塗装材料が用いられていたかを正しく理解することは、修理において、とても重要な意味を持つといえます。

奈良県桜井市にある談山神社は、十三重塔等多くの建造物が重要文化財に指定されています。近年、談山神社の各建造物は、経年劣化にともない、平成の大修理がおこなわれました。

保存修復科学研究室では、権殿（ごんでん）の内外装の彩色と塗装について80点以上の調査を実施しました。その結果、寛文または享保期の修理と思われる塗膜から、塗装材料として、油、松脂そして鉛が検出されました。この塗装については、修理に関する古文書から、「ちやん」という“ぬり”にあたるのではないかと考えられています。この塗装は日が当たりやすい外装の部材で確認されましたが、内装の部材では確認されませんでした。当時の職人は、耐候性を考え、あえて油系の塗料を使用したのかもしれません。

現在の談山神社は修理も終わり、権殿は「ちやん」塗で美しく仕上げられました。四季を堪能できることで有名な談山神社ですが、「ちやん」塗の権殿は四季にどのように映えるのでしょうか。

（埋蔵文化財センター　赤田 昌倫）

談山神社での蛍光エックス線分析の様子

平城宮跡資料館　秋期特別展

「地下の正倉院展ー木簡学ことはじめ」
「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」

1963年８月、真夏の平城宮跡の内裏北外郭官衙で、驚きの大発見がありました。後にSK820と名づけられるゴミ捨て穴から、約1,900点もの木簡が出土したのです。平城宮跡で初めて木簡が見つかったのは1961年１月のことでしたが、点数は数十点ほどでした。そこに、まさに空前の大出土。当時の調査員たちは興奮や喜びとともに、あるいはそれ以上に困惑を覚え、苦難に直面したことでしょう。

しかし、この発見は、日本の木簡研究を飛躍的におし進める起爆剤となりました。SK820出土木簡には文書・付札・習書といった古代日本における木簡の典型的な用法が凝縮しており、これらの調査・研究を通して木簡学の礎が築かれたといっても過言ではありません。そして、それは、全国の出土木簡の総数が40万点に迫ろうとしている現在も、高い有効性を保っています。

今年の「地下の正倉院展」では、このSK820出土木簡を中心に、産声をあげたばかりの木簡学が大きな成長を遂げてゆく過程を描きたいと考えています。研究の最前線に立った調査員たちの四苦八苦・試行錯誤を追体験しながら、木簡研究の基礎部分についての理解を深めていただきたいと思います。

そして、奇しくもこの木簡の大発見となった年、1963年４月に、平城宮跡発掘調査部（現 都城発掘調査部（平城地区））が誕生しました。本年は、特別展と同時開催で、「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」と題し、平城地区の発掘調査の歩みを写真で振り返ります。こちらもあわせてご覧ください。

（都城発掘調査部　山本 祥隆／企画調整部　渡邉 淳子）

SK820発掘調査のようす　※展示情報は巻末ページ